“いま、ふるさとの幸をよぶ”海士町民の歌
～再び注目の作詞家、宮田 隆さん～

今年7月、オリンピック東京大会に向けて制作された東京五輪音頭「2020」が発表されました。この歌は、1964年に制作され歌手の故・森山達也さんが歌ったことで知られる東京五輪音頭をリメイクしたもので、大変感動的なものでした。そこで、宮田隆さんが作詞を務めた『海士町の歌』を紹介します。

宮田隆さんは、50年近く前に作られた海士町民の歌「当時の想いはそのまま、現代の私たちにも通じるもの。」を前面に続ける海士町民の歌であり、「海士町の歌」を再度注目させることに成功したのです。

海士町民の歌
～再び注目の作詞家、宮田 隆さん～

海士町民の歌は、海士町出身の宮田隆さんによって作られたもので、1968年（昭和43年）に海士町が作曲し、この歌は海士町民の感情を象徴するものとして広く知られるようになりました。

現在、宮田隆さんは、海士町小学校の校長であり、当時の海士町の歌を再び注目させることに成功しました。この歌は、海士町民の歌として広く知られており、海士町民の文化を象徴するものとして多くの人々に愛されています。

海士町民の歌は、海士町民の感情を象徴するものとして広く知われるようになりました。その内容は、海士町民の歴史と文化を象徴し、海士町民の心を象徴するものとして注目されています。

今後もこの海士町民の歌は、海士町民の心を象徴するものとして広く知られ、海士町民の歴史と文化を象徴するものとして注目されています。